



神奈川大学フロンティアクラブ会報

発行 日 1999年 12月1日
編集・発行 神奈川大学フロンティアクラブ広報委員会
委員長 白井 宏尚
事務局 神奈川大学内
〒221-8686 横浜市神奈川区六角橋3-27-1
TEL. 045-481-5661
FAX. 045-491-7915

第 3 号

会員だより

研究成果に期待 産官学連携の新事業に従事

横浜産業振興公社参与・
産学共同研究センター準備室長



三七年間奉職した横浜市をこの三月に定年退職し、四月から地域産業の振興を担っている財団法人横浜産業振興公社で、新たに取り組むことになった産学連携事業に従事している。

産学交流事業は、古くて新しい課題である。特に目新しいものではないが、横浜市は仕切り直しとも言える施策の見直しを図り、経済局の中に専門の組織を発足させた。そして具体的な事業の実施は、当公社が担当することになり、私が最初の担当者になったものである。

最近、産学連携事業はブームとも言える話題になっているが、産学官それぞれに事情を抱えていると言えよう。それは、少子化や国立大学の独立行政法人化問題などで特色のない大学は、存在を危ぶま

和やかに有志懇親会

―母校の箱根保養所で

フロンティアクラブの世話人を中心とした有志による初めての懇親会とゴルフコンペが一月二十七日(土)、二十八日(日)の両日、神奈川県・箱根町で行われた。

懇親会は、箱根町・仙石原にある神奈川大学箱根保養所で実施。特別参加の学校法人神奈川大学藤本盛久理事長を含めて約20人が参加、ゆったりと温泉につかったあと、宴会部屋でお酒と料理に舌鼓を打ちながら懇親会を開いた。母校の現状やフロンティア

分野に挑戦するためには、大学の知能の活用が一段と重要になってきたということである。そして、国や地方自治体の場合は、地域経済を活性化し雇用や税収を確保するためには、新しい技術に挑戦するベンチャー企業の台頭を支援



プレーを楽しんだ。この日は、快晴、無風の絶好のゴルフ日和。スコアを天候のせいにするわけにはいかず、それぞれ一生懸命にプレー。高齢者も年齢を感じさせないしっかりした足取りで、完走。時には珍プレーがあったものの、

することが、重要な課題になっているという背景がある。幸い、神奈川大学にも「産官学交流事業推進室」が開設され、専任のリエゾンオフィサーが配置されたことは、時宜を得たものであり、高く評価している。そして、当公社が提供する横浜市鶴見区の「産学共同研究センター」で神奈川大学も東工大や慶応大学とともに産学連携による先進的な研究プロジェクトの実験研究を行うことになった。大学のためにも産業界のためにも研究成果に期待したい。

和気あいあいとした雰囲気の中で、全員無事にプレーを終えた。

懇親会、ゴルフとも普段は接触の機会が薄いフロンティアクラブの会員がお互いに意見交換したり、旧交を温めるいい機会になった。フロンティアクラブをさらに活性化させるためには、各委員会ごとの活動とは別に、たまには静養や遊び心も入った行事も必要なのでは。今回の参加者の間では、今後もこうした催しを年に何回か実施したいという意見が多かった。参加者は多い方がいいので、希望者は事務局まであらかじめ連絡していただければ、次回に参加の機会をつくりたい。

お知らせとお願い <事務局から>

*12年度フロンティアクラブ総会

平成12年2月26日(土)

ヨコハマグランドインターコンチネンタルホテルで
開催予定 子細は後日、郵送で連絡

*11年度の年会費未納の方は、払い込みをお願いいたします。

編集後記

フロンティアクラブ各委員会の活動が具体的に動き出したので、本号は活動の具体例を中心に編集した。フロントページで取り上げた産官学交流事業の中で紹介した「横浜産学共同研究センター」の準備室長が当クラブ会員の柳沢剛さんである。神奈川大学は他の大学とともに、この研究センターへの参入を決断、産業界と協力して、大都市の防災関連プロジェクトの研究開発に取り組む。その舞台となる研究センターの責任者がOBの柳沢さん。大学にとってラッキーな巡り合わせと言えよう。柳沢さんには、無理にお願いして本号の「会員だより」の執筆をしていただいた。フロントページの産官学交流事業の紹介内容を参考にしていたけど、産官学交流事業の意義と現状での取り組みを理解していただけたと思う。

「会員だより」の執筆者を募集します。希望者は事務局まで一報を。

友愛と雄飛

委員会活動のコンセプト 産官学交流委員会が決定

神奈川大学フロンティアクラブ産官学交流委員会は、今年七月から一〇月にかけて七回にわたって委員会を開催し、フロンティアクラブ会員相互の交流に向けての活動の在り方を検討した。

その結果、委員会活動のコンセプトは「友愛と雄飛」にすることを決めた。広辞苑によると「友愛」は、友人に対する親愛の情、「雄飛」は、勢い盛んに勇ましく活動することとある。会員相互のふれあいの精神を尊び、その輪を大きく育むことを目的にしようという意味が込められている。

コンセプトの決定とともに委員会の活動方針や主旨、講演会の開催などを決めた。

(1)フロンティアクラブ会員相互のふれあいの精神を高め、活動のコンセプトである「友愛と雄飛」の実現を目指す。

(2)現在の産業界(大小にかかわらず)に求められている

起業家精神(ベンチャービジネス精神)を検討する。(3)企業家精神を育てる環境としては、官公庁および学会の支援なしでは成功は不可能である。

(4)神奈川大学卒業生の産業界、官界、学会での経験と知恵を公開し、相互の意見交流と交歓の場の提供を試みる。などで合意した。

講演会については、来年二月二十六日(土)にヨコハマグランドインターコンチネンタルホテルで開催予定のフロンティアクラブの一二年総会に合

わけて神奈川大学教員による講演会やシンポジウムの開催を企画している。内容については、総会通知と併せて会員にお知らせする予定なので、大勢の参加を期待している。産官学交流委員会は、独自の活動と並行して学校法人神奈川大学産官学連携推進室とも連携した活動を展開する。大学の産官学連携推進室は、平成一二年からの本格活動に

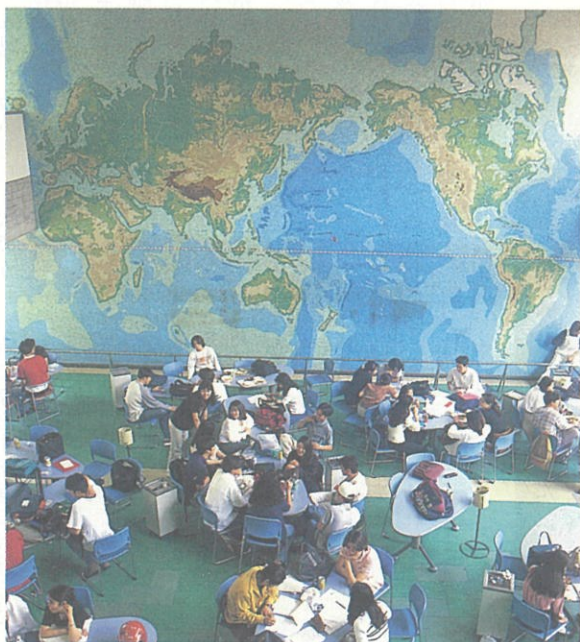
向け準備を進めている。その一つは学内シーズ情報の公開である。このためインターネットのホームページを開く準備をしている。完成すれば、フロンティアクラブ会員からもニーズ情報を寄せてもらいたい大学のシーズを活用して、その研究・開発成果を社会に還元することを考えている。その際は、会員各位の積極的な協力をお願いする。

このほか「横浜産学共同研究センター」への参加や来年二月に開催予定の「テクニカルショウヨウコハマ二〇〇〇」(仮称)への出展を計画している。

横浜産学共同研究センターは、横浜市と財団法人横浜産業振興公社が地域産業集積活性化法により設置する京浜地域の産業活性化支援施設。研究者の多様なニーズに応えるため、大規模な実験空間を持つ実験棟と、小規模の研究空間をはじめ会議室やサロンを持つ研究棟で構成される。

所在地は、横浜市鶴見区末広町。実験棟は平成一一年九月、研究棟は同一三年春に開設の予定。企業と大学の産学共同研究の促進が目的であり、対象は入居者双方、またはいずれかが横浜市内に所在する企業と大学が共同して行うプロジェクトで、平成一二年三月までに入居可能なプロジェクトであることが条件となっている。

参加する「学」については理工学部を持つ市内の八大学が対象になっている。神奈川大学には、他大学の研究プロジェクトとの兼ね合いから大都市の防災関連プロジェクトにして欲しいとの要望があり、これに応えることになった。



就職講座でOBが講演

KUFCC活動が本格化

神奈川大学フロンティアクラブ(KUFCC)就職支援委員会は、母校学生の就職活動に役立てようと今夏、フロンティアクラブ会員二人を就職講座の講師として派遣した。自動車部品と住生活関連商品の総合メーカー、アイシン精機株式会社専務取締役夏目美喜雄氏(三五年経卒)と株式会社共同通信社代表取締役専務白井宏尚氏(三五年法卒)の二人。このうち、七月一日(土)に「学生生活と就職」をテーマに講演した夏目氏の講演内容の要旨を以下に紹介する。

■自分に合った企業選択を



—夏目氏講演要旨—

学生生活と就職というテーマを考えるに当たり、まず企業環境を整理してみたいと思います。存在価値のある企業とは、どんな企業かを考えてみよう。過去のモノ不足時代には、企業はいかに効率良くモノをつくり出すかが命題

であり、官僚に焦点を合わせ企業側に立った規則・規制の下に生産、販売活動を行ってきた。その結果、モノさえ生み出してれば、価値・満足を提供しなくても企業は存在できた。

しかし、過剰と言われるほどモノが十分ある現在では、モノをつくるだけでなく顧客・市場に焦点を当て、その中で消費者全体ではなく(一定の層に)ターゲットを絞り、価値・満足を提供し続けなければ、企業は存在し続けられない。

環境の変化により時代の求

めるもの、価値観(座標軸)が変わり、企業に求めるものも変化しています。個人も同じく企業・社会に対して価値を生み出せない人は存在できない。

一方、企業側からの見方として、人的資産は二種類に大別できる。一つは五—一〇年の短期間で専門性を発揮して次のテーマ(企業)へ移る人材。もう一つは新卒で入社し二〇—三〇年勤めて企業風土を継承していく人材である。学生諸君には、どのコースを選ぶかが、自分自身の生き方であることをしっかり認識

して欲しい。

企業環境について述べてきましたが、企業だけでなく個人も変化に対応し、お客様に価値・満足を提供し続けなければ存在し続けられないのです。少し話がそれますが、ダーウィンの進化論に次の一節があります。「ずっと生き続けている種は、強い種でも賢い種でもない。変化に対応できる種である」

水にならず冷静に自分を見つめること。
就職は受験ではないので、受ければ良いのではない。自分に合った企業でなければ自分も企業も満足は得られない。つまり、企業の望む人材に合わせようとすると、ありのままの自分でなくなる。就職までの短期間で今更、自分を変えないので、自分を見詰め直し、ありのままの自分を出して採用してくれる「相思相愛」になれる企業を探すことが肝要である。



▲就職資料室

厳しい就職戦線 就職支援に協力を

全国の学生の就職内定状況は、依然厳しい。バブル経済の崩壊後、超低空飛行を続けていた日本経済は、政府のなかり構わぬ積極財政の効果によりようやく出始めて、なんとか上昇気流に乗り始めたように見える。確かに多くの経済指標の数値は、改善傾向にある。企業の決算も黒字計上が増えている。

ただし、これらは大胆なりストラが功を奏したのが最大の原因であり、各企業は競争力をさらに堅固なものにする体質強化のため人員の削減を

迫られている。日産自動車やNTTは、向こう三年間で二万人を超える社員の削減策を発表、他の多くの企業もリス

いる。四年生の就職内定は、推定で六五%程度にとどまっている。大学の就職部によると、おおまかな傾向としては情報系は善戦しているが、化学、建築系が苦戦、女子より

男子が苦戦しているという。このため就職部は、学生向けに就職講座を開いたり、全国の企業に協力を呼び掛けるなど就職支援に取り組んでいる。就職講座は、各界専門家の講演のほか、適性検査や一般・経済、作文などの模擬試験を実施している。

フロンティアクラブ就職支援委員会は、大学のこうした就職支援活動に側面から協力することにし、その第一弾として、就職講座に卒業生を講

師として派遣した。少子化が一段と進む中で、大学への受験人口は年々減り続けている。一〇年後には大学入学希望者全員が入学できる、全入時代になるといわれている。定員の数倍にもなるこれまでの大学受験構造のなかで成長してきた全国の大学は、既に受験生の激減という構造的な荒波に襲われ始めている。

いかにして、有能な学生を多く集めるかが、二一世紀に大学が生き残るためのキーポイントになる。そのためには時代の要請に合った教育内容の充実が先決だが、それと同時に学生の就職状況・内容も大きな比重を占めることになる。

今年度から実施 村橋フロンティア奨学基金

神奈川大学フロンティアクラブ会員からの寄付金を基にした「村橋・フロンティア奨学基金」が創設され、平成一一年度から学生に支給されることになった。

この奨学基金は、フロンティアクラブ会員の村橋三好さん(一四賢)が大学当局に提供した寄付金を基に設立された。この基金から生じる果実(利息)にフロンティアクラブからの寄付金などを加えて年度ごとの支給額を決める。最初になる一一年度の総支給額は三〇〇万円に決まり、一〇人

の学生に一人三〇万円ずつ支給されることになった。一二月に支給学生の選考を終え、平成一二年一月に支給の予定。

奨学基金の実施に当たって「村橋・フロンティア奨学基金規程」を定めた。それによると、給付の額及び件数は毎年度ごとに理事会が決定し、必要に応じて予算措置を講じることになっている。

奨学金を支給される奨学生は神奈川大学及び神奈川大学大学院の学生で、学業成績及び人物とも優秀と認

められ、経済的に学資の補助を必要とする者のなかから選ぶ。神奈川大学給費生規程による給費生や大学が定める他の奨学制度による奨学生は、この制度の対象者から外す。奨学生の採用は、その年度限りのものとしますが、次の学年以降も奨学生となることは防げない。

奨学金を希望する学生は、所定の奨学生願書に必要書類を添えて学生部学生課に提出する。出願のあった候補者の中から理事長が奨学生を決定し、奨学金及び村橋・フロンティア奨学生章

を授与する。理事長は奨学生の決定に資するため諮問委員会を設置することができ

る。奨学生に決まった学生は、所定の誓約書を提出する。学則に基づく退学、除籍、懲戒を受けた場合やその他奨学生として不適当と認められた場合は、奨学金の給付を取り消されることがある。



▲就職展